

## 巻頭言

地方ぐらし  
の実感

高橋 五郎

(愛知大学)

私的な話を中心である。そんなものは読みたくないと思うひとは、是非読まないで下さい。

この春、3年間住んだ宮崎県を離れた。住んでいてよかったと思っている。地方のことは地方に住んでいなければ分かるものではない。このことが実によく納得できた。東京のひとの発想は、東京を円心に置き、地方を放射状に引いた線上のどこかに位置づけようとする。地方は、東京に強い憧れを抱きつつも、東京のようにはなれないことを知っている。東京のようになれないならば、東京との時間距離を少しでも縮めようとする努力は大変なものだ。整備新幹線の着工が決まったが、これを推進してきた地方の人々の気持ちは痛いほど分かる。「地方分権」が存在しない現状では、「辺鄙」はすなわち「不便」であり、「格差」を意味する。「辺鄙」からの脱出は、すなわち新幹線建設なのである。短絡といえばそれまで、採算の合わない新幹線づくりは第二の国鉄づくりというのは、都会のひとのエゴである。中央と地方、都市と農村というのは、日本国内での南北問題という側面もある。採算だけを基準にしていけば地方は崩壊する。この財政再建時代に何と保守的なことをいうのか、と笑いたい人は笑って下さい。ただしいま笑ったひとは、最低1年間、地方で暮らしてみてください。それでも、採算に合わないことはすべきでないという気持ちに揺らぎのないひとは堅くて立派です。

宮崎は地方の一つである。そして、自立を熱心に模索している。涙ぐましい努力とっていい。しかしそれがなかなかできない。困ったときはやはり中央頼みのようで、リゾート施設のテレビコマーシャルも宮崎には映らない。しかしどうすれば自立できるか、暗中模索の日々が続くようだ。

その宮崎には隔週で、4年生のために非常勤講師で行くが、以前とくらべ、宮崎に対する感覚がやや変わってきた気がする。住んでいたところと違って、すべてが一過性のものという感じだ。空港に降り立つと、いつもは、食料品を買いに出かける心の準備をしたものだ。いまは、その必要もない。まえの職場で会う教員や職員の態度は変わらないが、自分にはすでによその気分がある。それまで暮らした研究室をそのままあてがってもらってはいるが、中には、机とからっぽの本棚、応接セットがあるのみで、なにやらテレビの刑事ものに出てくる取調室にいるような気分にもなる。

宮崎で感じたもう一つのことは、農業と自然についてである。農業は宮崎の主要な産業である。自然は天与のものだ。

宮崎にとって、農業は経済的にも歴史的にも貢献してきた大切な産業であり営みである。農業が宮崎の人々のところをまろやかに、優しく育ててきたのではないかと思う。宮崎弁の抑揚には、「我」の主張よりも相手を気遣い、相手の主張を優先させようとするような誘いの響きを感じられる。この抑揚は、初めて聞く者には少なからぬ戸惑いを与えるが、やがて分かる。

しかし農家戸数の減少は止まない。採算だけを重視した政策の陰で、畜産を中心にどんどん廃業に追い込まれた農家は行く手を失っている。救いの一つは自然、あの青く輝く空と緑である。